

【エッセイ】

アイに出会う言葉

矢野博史*

昨今、至るところに「アイ」が溢れている。といっても「愛」ではなくて「I」。Informationの頭文字である。情報社会（Information society）という言葉の誕生からすでに約60年。本格的な情報社会に入ったとされる1990年代から数えても約30年が過ぎた。いわゆる脱工業化社会論、工業化社会の次に来る社会はどのような社会なのかという議論は、当初提示されたこの「情報社会」という言葉に見事に収斂していき、今日の社会もその延長線上に位置づいていることは間違いない。

こうして「アイ」のある言葉は人口に膾炙するようになった。現在の、そして将来の社会像は「I」抜きには語れない。そう、だから巷は「アイ」で溢れている。

その「アイ」の中でもIT（Information Technology）は社会を席卷し、やがてICT（Information and Communication Technology）という言葉も加わっていった。さらに今日ではIoTという言葉も頻繁に使われている。といっても、この「I」はInternetのI。IoTとはInternet of Thingsの頭文字で、身の回りのさまざまなもの（Things）がインターネットに接続されてつながっていることを指している。

このIoTはAI（人工知能）などの技術と結びつき、生活に大きな変化をもたらしている。たとえば、私たちの方からインターネットにアクセスすることなく、すなわちわざわざ手間隙をかけることなく、インターネットに接続された身の回りのものが当人に有益あるいは有用と思われる情報を先回りして提供してくれるという状況が生み出されている。我が家でもスマートスピーカーと呼ばれる端末が毎日こまめにニュースや天気予報を知らせてくれるし、今夕にはネット通販の荷物が届くことまで告げてくれる。世の中便利になった。

しかし、照らされるものあれば、翳るところあり。だから物事はできるだけ多面的に捉えた方がよい。「I」に溢れた事態も例外ではなかろう。便利だからこそ、やはり立ち止まって「I」について考えてみることも必要だと思う。

という訳で、これから「I」に関して少し考えを巡らしてみたい。そのためには何か入口となる問いが必要だ。私ごとだが「さて、何から問うべきか」と思案するときはいつもソクラテス先生の教えを守ることになっている。

ソクラテスは『メノン』という対話篇の冒頭でHowよりもWhatを先に問わねばならないと語っている。使い方を知ろうとするより前に、そもそもそれ自体が何かを先に考えることの方が大切だと説いたのである。そんな訳で「I」に溢れ、その活用（How）が現代社会に必須のリテラシーといわれるようになった今だからこそ、「I」、すなわち「情報」そのもの（What）について考えることから始めてみよう。

「情報」とは何か、と問おうとするとき、ベイトソン（Bateson, G. 1904-1980）の論考は示唆に富んでいる。その中でベイトソンは、情報とは端的に「ちがいを生むちがい（a difference which makes a difference）」（Bateson, 1979/2001, p.134）であると定義している。ここでベイトソンが言いたいのはこういうことだ。

ひとまず、「ちがいを生むちがい」の前者を「ちがい①」、後者を「ちがい②」としよう。「ちがい①」は〈私〉の中に生じた変化のことで、いわば〈私〉に対して新たにもたらされた出来事の認識＝「意味」と言い換えることができる。そして、「ちがい②」は「ちがい①」の起点となった出来事＝変化のことである。こう考えるベイトソンにとって情報とは、変化への気づきがなくては生まれないものとなる。

同じところに同じものがあれば、そこに物理的な動きは何も起きていないようにも思えるが、そこには「過去」から「現在」という時間の変化は生じている。少しくどいが、ここでいう世界の中に起きている変化には「時間」の経過も含まれていることは付け加えておきたい。

もう少しベイトソンの語る「アイ」を咀嚼しておこう。「一葉知秋」という言葉がある。1枚の落葉から秋の訪れを知ることができるように、ほんの僅

* 1 日本赤十字広島看護大学

かな兆しを逃さず大勢を察知することを意味している。大勢の察知まで至るのは凡人には少々難しいかもしれないが、落葉から秋の訪れを知ることならこの私にだってできるはずだ。しかし、「落葉」という出来事に含まれている「ちがい」、昨日は木の上にあった葉っぱが、今日は地面に落ちているという「ちがい（＝ちがい②）」を見過ごしては、秋の深まりという季節の変化＝「ちがい（＝ちがい①）」にたどり着くことはない。

ここで、私たちはしばしば見過ごしてしまう存在だ、ということが看過されてはならない。気づかなければ何もなかったことになる。ベイトソンの言うところの情報とはそういうものだった。だからこそ、現在のインターネットを通じた情報の取得は便利で都合がよいのだといえる。検索サイトで何かの商品に関して調べようものなら、それ以降、その商品の関連広告が自動的にインターネット・ブラウザに表示されるようになる。私の興味や関心の対象だと推測された「アイ」が、私の意図を介さずに自動的に提示されるようになるのだから、これは確かに便利だ。

ただし、こうした状況は、窓の外景色の中から一枚の落葉に気づくこととは明らかに位相が異なっている。落ち葉はけっして私の意識に自ら名乗りをあげることはない。ただ、落ちていくのみ。あとは私たちがそれに気づくかどうか。つまり、落葉の場合は、「ちがい」を受け取る感性があるか否か、という点に情報の取得は強く依拠している。もちろん、私たちの感性は IoT からブッシュされる情報を見流し、聞き流している場合もあり、すべてを受け取っているわけではない点は同様であろう。しかし、能動―受動という軸で位置取りを測るなら、落葉に気づくことによる情報の取得の方が明らかにその能動性は高い。

世界に生じているさまざまな出来事の中から釣り上げられた“ちがい”だけが、私にとっての意味となる。その私たちが住んでいる世界は広大で、とてもディスプレイの中だけに留められるものではない。だから視野を広げて、より能動的に世界と関わることはとても大切だ。やはり一枚の落葉に気づいていける程度の感性は備えておきたい。ではそのために私たちにできることは何か。感性をひたすら磨くことなのか。だが、感性を磨くというだけでは、あまりに曖昧だ。この広大な世界のなかで「アイ」と出会うために、私たちに準備できることがあるとすれば、それはいったい何だろうか。

幸いにも、そのために、なにか新しいことを始め

る必要はない。私たちには、日常生活のなかで十分すぎる準備ができているからだ。あとはほんの少しだけ今よりもその点に意識的であった方がよいというだけである。私たちが日常的に「アイ」と出会う場、それは言葉を使う場面だ。実は言葉には、私たちの認識の有り様を映し出す鏡という性格が備わっている。この点が重要な導きの糸となる。

言葉の働きを認識と結びつけようとする考えは、哲学や言語学の分野で20世紀中期に起きた「言語論的転回（linguistic turn）」の中に生まれたものだ。それ以前は言葉は事物に貼られた単なるラベルのようなものとみなされていた。先に事物があって、それにラベルとして言葉が与えられるというのが伝統的な考え方だった。それに対し、「言語論的転回」以降、言葉があることによって事物がそこに現れるのだと考えられるようになった。言葉が先にあって事物はそれとして意味づけられる。すると「アイ」との出会いは言葉の使用に始まることになる。

具体的にいえばこういうことだ。「大小4枚の翅を使ってひらひらと舞う昆虫は？」と問われると、蝶や蛾を思い浮かべるだろう。そして、蝶と蛾のどちらを好むかと訊かれると多くの人は蝶だと答える。けれども、蛾は蝶に比べて美しさに欠けるかというと、そんなこともない。鮮やかな翅色の蛾もたくさんいる。ちなみにフランス語では蝶と蛾の区別がないそうだが、仮に日本語にも蝶と蛾の使い分けがなかったなら、これほど私たちが蛾をぞんざいにすることもなかったにちがいない。

たとえばこのようにして言葉によって秩序は作り出されている。4枚の翅で飛ぶ昆虫には、蝶と蛾を区別した言葉の使用によって、極端な扱い方の差が生じている。だから「アイ」に出会うための言葉の使用はより慎重に省察的であるほうがよい。

もう少し4枚の翅で飛ぶ昆虫との遭遇を例にして考えることにしよう。この昆虫に気づいた私が、その自分自身の行為を言語化する、すなわち自己言及的に言葉を選ぶとすれば、どう表現するだろうか。多くの場合は昆虫の動きを視覚的に捉えているのだから、「みる」と表現するのが一般的だろうと思う。しかし、『日本国語大辞典』（小学館、2000-2002年）によるとこの「アイ」の取得につながる「みる」という動詞は、22の同訓異字がある。先に述べたように言葉によって現実が構成されるのだとすれば、極端に言えば、「みる」の選び方によって、22通りの現実が構成される可能性があることになる。実際には昆虫の動きを視覚的に捉えている際には、使うことのない言葉が22の「みる」のなかにあると

しても、残りの複数の言葉の使い分けは、自己言及的に行為を差異化していくことだといえる。そして、その差異化された行為に応じて「アイ」は獲得される。たとえば、蝶と蛾を区別せず飛んでいる昆虫に気づいただけなら「見た」であろう。一方で、昆虫に関連して所有する知識に照らしながら蝶と蛾を区別して「みた」のなら「観た」が選択されることになる。

この「みる」という動詞は、文字通り「何をみるのか」という点において「ちがい②」へと接近し、そこから「ちがい①」を生み出すという点において「アイ」の構成と直截関連している。このように「アイ」はそれを語る言葉に応じて手に入れることができる。

最後に例をもう一つ。「みる」のなかから5つ選びだし、たとえば「見る」―「視る」―「観る」―「診る」―「看る」順序で並べてみると、そこには興味深い「アイ」の世界の展開を見出すことができる。そう、「看る」に至るまでに次第に深まっていく「アイ」がこの並びの中には表現されている。「看る」ことは「診る」ことに基づき、「診る」ことは「観る」ことに基づく、さらに「観る」ことは「視る」ことに基づき、「視る」ことの始まりには「見る」ことがあるというふうに、「みる」は順序性をもってつながっている。ただ「見ている」だけではいつになっても「看る」に至ることはない。

「看る」を看護ケアと考えるなら、それは病者と出会うこと＝見える（まみえる）ことから始まる。この出会いの中では、すでに医療者としての視点を

持って「みる」、すなわち相手を患者として「視ている」ことだろう。この視点の獲得が看護における「アイ」の世界への一歩目となる。さらに「視る」から「看る」へと至るためには、「観て診る」こと、すなわち観察し診断するプロセスを要するが、そこに「アイ」を成立させるためには医学的な知識の獲得や関連した経験が必要となるだろう。この一連のプロセスにおいて、「みる」ことに応じた「アイ」の構成とその「アイ」を参照して次の「みる」が導かれるという往還の中、グラデーションのように「何をどうみるか」ということは変化し、「看る」に向けた深度は増していくことになる。

例に挙げた看護はこのような「アイ」に満ちた営みである。ただし、この「アイ」は深化させようとする意思とそれを可能にする知識や経験によってはじめて手に入れることができる。

このように「アイ」はそれを語る言葉の力によって生み出され、より深まっていくという一面を持っている。これからの社会、インターネットの大海原を泳ぎ切るリテラシーを持とうとするのもよし、多様な「アイ」を手にするために感性を磨くのもよし。しかし、加えて自らの言葉で「アイ」について語ろうとすること、巷に溢れる「アイ」に溺れないためには必要な作法だと思う。

文 献

Bateson, G. (1979)/ 佐藤良明 (訳) (2001). 精神と自然 (改訂版). 新思索社.